

朝の通勤電車を降りて階段へ向かっていった法（みのり）は、急に胸が苦しくなり階段の側へうずくまつた。

“いつもの発作だ”と思つてカバンから薬を出そうとするが手がのばせない。

その時、「どうしました。」といつて青年がのぞき込んできた。

法はカバンを指でさした。青年は「開けていいんですね。」といつて素早く開けた。法は薬の入つているポケットを指した。

「これですネ」といつて青年は法の口へ入れてくれた。

法はほつとして目で礼を言つた。そして青年はそばのベンチまで法を連れて行き立ち去つた。

その夜、キッチンで身重の妻の良（りょう）と義母が、楽しそうに話しているのを聞いているうちにうとうとしてしまつた。

ふと話し声で目が覚めると、側で二人が茶を飲みながらテレビを見て話している。

「遺伝子から見てもアフリカの女人にまで溯るのねえ。」

「その人から生まれて今の人間がいるんだもの『人類みな兄弟』とかいうのも満更じやないみたいだねえ。」

「だけど今じやあまりにも色々な人がいて複雑すぎるわ。」

「ほんとに仲良く暮らす事が出来ればそれにこしたことはないんだけどねえ。」

法は、「お義母さん、おやすみなさい。」といつて室を出た。発作の事は言わなかつた。



法は祖母の新盆で一人故郷に帰っていた。ふと耳を澄ますと神社から太鼓の音が聞こえてくる。

「母さん、神社へお参りに行つて来ます。」といつてふらりと家を出た。何人かの人達とすれ違い言葉を交わしながらゆつくり歩いた。丘のふもとの神社の

階段の前に来た。法はふと「一〇三段。」とつぶやいた。高校の時トレーニングに上り下りしたものだつた。

中程まで上がつたところで上から下りて来た人が肩をポンとたたいて

「法ちゃんじゃないか！」

「あつ、おじさん御無沙汰して居ます」

「父さんがこの間の寄合いで法ちゃんが係長になつたつてうれしそうに話していたよ。じゃあがんばつてな。」

「おじさんも御元氣で。」

法は自分には何も言わないのに、とふとおかしかつた。

鈴を鳴らして手を合わせていると娘の顔が浮かんで来た。この頃につこり笑うようになつたのだ。思わず「恵（めぐ）が健やかに成長しますように」とつぶやいた。

それから神社の裏手にまわり小道を下りていつた。夏草がきれいに刈られている。

少し歩いて大木のそばの石に腰かけて汗をふいた。蝉の声が降り落ちてくる。ジーと聞いているとふと遠い日の事が思い出された。

あの日もこんな暑い日だつた。父と山の下草刈を終えてここで一休みをしている時、

法は思い切って話出した。

「父さん、先生から進路の事で話しがあつてそろそろ決めなくてはいけなくなつたんだけど……、僕高校卒業したら働くかと思うんだけど……。」

父はじつと聞いていて、「どうしてそうしたいんだい？」

「……」

「法、正直に話さんと父さんはわからんぞ。」

法は意を決して「父さん僕、弟や妹が三人もいるし少しでも生活の足しになればと思つて……。」と言つた。

父はしばらく間をおいて、「法、父さんは法のほんとうの気持ちが知りたいんだ、大学へは行きたくないのか、行きたいのか」

「……」

「法、お前は賢い子だからひよつとして自分達弟妹が皆養子で、これ以上私達に迷惑をかけられないと思つてゐるんだつたら大間違いだぞ。わしは法達を母さんと楽しみで育てて来たんだからな。これから人間として真つ当な道を歩いて幸な人生を送つてもらいたいと願つてゐるんだ。それが父さんと母さんの喜びなんだから。お金の心配ならいらんぞ、いざとなりや山や畠はおしいと思つてなんかいないんだから。」

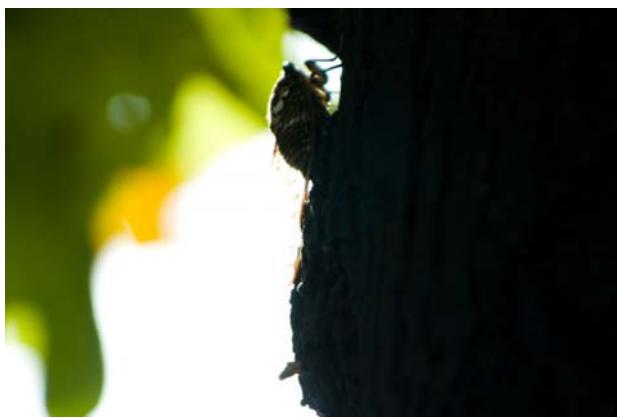
「……」

「法が大学へ行きたくないなれば行かなくともいいんだよ。だが父さんは思うんだが若いときに学問や色々練成しておく事は、人間に成つてゆく大本（おおもと）だと思うんだがなあ」

「……」

「父さんや母さんに何も遠慮はいらんぞ、法がすれば弟や妹もほんとうの気持ちが言えなくなるからな。」

法はハラハラと涙を落し肩をふるわせて泣いた。そして蝉の声が雨のようにな降つて来るのを聞いた。



立冬、足もとを風が走りぬける。街路樹の木々も少し色づき始めた。今日は一（かず）との話し合いだ、ふうつと溜め息が出た。又暴れるだろうか、唾を吐き散らすだろうか、久々に手にあまる少年だ。だが法の内にはハツキリしている事がある。だけ罪があろうとも今からその気になれば人生やり直せて穏やかな生活が必ず訪れる。そうなるよう更正させてゆくのが仕事なのだから。

「おはようございます。」と声をかけながら門を入つていった。

午後二時、廊下を大声が響き渡る。

「おれを殺せ、早く殺せ！！」

「静かにしないか！」

面会室のドアが開いて二人の係官にかかえられるようにして入つて来た。法の前に来て思い切り椅子を蹴飛ばした。「こら！」と押さえられて椅子にすわらされた。

一は法をにらみつけて「お前におれの気持ちなんかわかるか！」と叫ぶと机を足で蹴り、つばを吐き散らした。

法は「話しなどとても出来ない」とつぶやいて係に頭を横に振り連れていくようにながした。

急に外が暗くなり始めた。『もうじき五時か』ぼんやり外を見ていると仲間内から『父つつあん』と呼ばれている渡辺係長から『一パイ寄つていきませんか』と声をかけられた。

法は『お供します』と言つて二人で外へ出た。

駅の近くの一軒の赤ちようちんの屋台へすわつた。暖かい日本酒が体に染み込んでゆく。ほつと溜め息をついた。

『係長、一は手をやかせますねえ』

『ええー。もう内へ来てから二ヶ月にもなるのに落ちつきません。私の力無さです。』

『いやあ、あんな子も時々いるもんですよ』

『……』

『しかし一もひよつとして悪態をつく事で自分を何とかしようとしてがんばつているのかもしだれませんねえ』

『がんばるですか……、そうだとしてもいつまでもあのようではあの子の体が氣になります……。何か氣を落ちつかせるものがあるといいのですが……。』

のれんがゆらゆらゆれた。

渡辺係長は法に酒を注ぎながら「そういえばあの子を見ていると時々電車の通る音がしますとね、ジーと聞いていて顔が穏やかになるんですよ」

「そうですか、良く見られているんですね、さすがベテラン係長」

「いやいや私は万年係長、何十年も子供達をみて来ますとそれぞれ色々と発信してくれるものがありましてね」

赤い提灯が震えているようだ。

「そうですか。：：渡辺係長ちよつと子供っぽいですが一に電車の本でも見せたらどうでしょうか」

「そうですねえ、とにかく何でもやつてみますか、何がきっかけで落ちつくかわからりませんからなあ」

「じや明日本を出しておきますからよろしくお願ひします。」

「たゞいま！」

「おかれりなさい。さあ恵ちゃんお風呂へお父さんに入れてもらいましょうね」

「そうそう今日母が来てね、恵と遊んでいたら寝返りをうつたのよ。喜んで喜んで

デジカメでパチパチ撮りながらなぜかもう死んでもよいと思うつていうのよ。初孫つ

てあんなふうに思わせるものがあるのかしらねえ

「もう連れて来ていいよ！」

「ハイ、ではお願ひしますね、お父さん！！」

「さあ洗つたから湯につかって出ようね」といながら子供の無邪気な顔を見て、いふと何と可愛いのだろうと胸の奥から突き上げて来るものがあり、思わずほおずりをしてしまうのである。

一は最初は電車の本に興味を示したが、その内見向きもしなくなってしまった。一は法の心の奥底に沈みこんでいった。

正月、法は妻の良と恵を連れて故里に帰つていた。今日は神社に初詣に來ていた。良が「お父さんお母さんや皆んなが、あんなに恵の事を喜んで下さるとはほんとにしてよかつたわ」とうれしそうにいった。

「あゝ、初孫だからねえ、良もあまり氣をつかわなくていいよ。⋮⋮明後日の朝家に帰ろうね」

鈴の音が一際大きくあたりに響き三人は深々と頭を下げた。

「お祖父ちゃん、今夜はここで寝させてもらうようにと母さんが言っているので、おじやましますね」といつて離れの室に入つて來た。

「おおー、法と枕を並べられるなんてうれしいね、良さんや恵はどうしたんだね」「妹達が一緒に寝たいと言つて僕は追い出されたのさ」

「アハハ⋮⋮そだつたのか」

そのときコトコトと足音がして母が入つて來た。

「おじいちゃん、法、お酒とおつまみ持つて來たから二人で適当にやつてちようだ

い

「ああ、母さん有りがとう」

法は「さあお祖父ちゃん、おひとつどうぞ」



「うん、ちよつとだけの……ああ、美味しいねえ、さあみのりもお飲み」

「ほんと美味しいね」

「法、仕事はどうだい」

「うん、精一パイやつてるよ」

「そうかい……法のような優しい子に仕事は厳しくないのかね」

法はふと一の事を思い出しだまり込んでしまつた。お祖父ちゃんは「さあ、寝るとするかなあ」といつて立ち上がろうとした。

「お祖父ちゃん、ぼくどうしてよいかわからぬ少年がいるんだ、聞いてくれる？」

「うん、聞くだけなら聞かしておくれ」

「△という子がいるんだけど、もう半年もなるのに暴れるか、口を開かないか、寝るだけで、医師は特になにもないというし、ぼくもほとほと手を焼いているの。」

「……そうかい。その子はどんな生い立ちだい」

「うん、小さい時親の暴行を受けて施設へ入つたり、親戚の家を転々としたりで中学二年の時飛び出してあちらこちら遊び廻り人を傷つけてしまつたのだけど、……そういう子供も今まで何人もいて少しずつ落ちつきを取り戻し、その子らしくなつてくんけど、△はその兆が全く見つからないんです」

「そうかい」

「僕、この頃ふと思ふんだけど前に人類の祖先を溯つてゆくと、アフリカの女の人に
たどりつくというのをテレビで見た事があるんだけど、その時、直感的に、『ああ！
そうか人間って、話し合えばどんなに難しいと思われる事でも絶対通じていけるんじ
やないだろうか』とね」

「どうしてだい」

「うん、理屈ではうまく言えないんだけど、人間としての遺伝子が引き継がれたよ
うに親愛の心も皆持っていると思えるんです」

「どうして、そういえるんじやね」

「ううん、例えば駅で苦しそうにしている人をみると知らない人でも駆け寄りたく
なるし、その他いっぱいそういう事つてあるじやない。そういう時、誰でも自分をそ
うさせる心があり、相手にも心があると無意識に思つて自然にするんじやないのかな

あ

「それで」

「うん、その心が△にあるはずなのにどこにあるかわからないの……やっぱり親

とか、社会の影響で△のように心を無くしたようになつてしまふのかなあ」

「でも同じような子が皆んなそんな子になるつてこともないだろう」

「それは、そうなんだけど……」

お祖父ちゃんはキセルのたばこに火をつけると美味しそうに吸いながら、「法は今その子の親の影響と言つたが、親の影響つて絶対的なものがあるかのう。法は今親になつたけど親は何していくんだい？」

「そりや恵の為に一生懸命働くよ」

「そうだなあ、わしもばあさんと一生懸命働いて三人の子を大きくしてきたさ、だけど考えてみりやわしのした事なんてたかだか雨露をしのぐ家と、その時々にいる金を用意しただけなんじやよ。」

「……」

「おばあさんとて、食べるものを用意し、洗濯して掃除していただけなんじや」

「そうかもしれないけど父さんはそうして育ててもらつて立派な人になり、ぼく達四人も引き取つて育ててくれたんでしょ」

「そうじやのう、そうやつて育ててくれたものを親と言うんじやとしたら、父さん母さんだけが親かのう」

「どういう事？」

「うーん、何と言つたら良いかのう、つまりいまの法を育ててくれたものは他にないのかのう」

「……そういわれれば友達も学校も僕を育ててくれたという事になるのかなあ」

「そうじやのう、近所の人達もその他いっぱいいるわのう。」

……

「ところでみのりの体はどううだい？」

「体？」

「三キロ位の体から今は七〇キロにはなつてゐるかのう、その体と三一年間のエネ

ルギーっていうものを作り成長させ持続させてこれたのはどうしてかのう」

「ええっ！……そりやー米や野菜や魚その他いろいろ食べて育つたけど、……ええ

つ！ 確かに僕の体を育てて守つてくれたよね……。ええっ！ 鰯や人参が僕の親！」

法はしばらく手をほほに当てじいと考えた。そして静かに言つた。

「お祖父ちゃん、じや、太陽も、雨も、風も、川も、海・山・大地全部、親に視え

るよ。そして今も育て、守つてくれてゐるつていうこと？」

しばらくして咳いた。

「みんな僕を育て守つてくれてゐるのだ。傘だつて雨から、コートだつて寒さから。

そして学問や文化、その他諸々の有形・無形のものを受けて育ててもらい人間らしくなろうとしているのだ。』

そう言うとじつと空（くう）を見つめ、つぶやいた。



「そうだったのだ、人間を含め宇宙自然界の働きは『愛』なのだ。『何と広大無辺の『愛』なのだろう』」と思つたとたん、体中に電流のようなものが走り、法の目からハラハラと涙が落ちた。

たばこの煙をフウーと吐くと「わしは難しい事はわからんが宇宙自然界がわしをす

つぱり包んでくれていてのう、まあ時には厳しい事もあるが春のように暖かいのじや。

それが心地良く親のように思えてのう。わしは八〇を過ぎても自然の子供じやと思つて暮しているんじや、それが楽しいんじや、幼子のようになあ……アハハハ……」

法も思わず笑い「じや、僕も死ぬまで自然の子供でいられるね」

「それからさつき法が話してたもう一大事な親、アフリカの母さんの事なんだが、母さんから生命は切れる事なく恵まで繋がつて来ているという事実はあるわのう。その事はその間生まれて育ててもらい親になり、くり返しきり返し法まで来た事を思えば御先祖様に感謝感謝だ。どこか一ヶ所でも切れてたら法はこの世に出現出来なかつたのだからのう。そういう所から見たら今は網の目のように繋がつている人間社会の全ての人に対して親であり、兄であり、弟であり、孫であり、どんな身替りもさせてもらえるわのう。」と、キセルの灰をトントンと落し

「それにもう一つ、別の見方からしたら今地球上では六〇数億の人間が生きているが同じ人はいないように見えるわのう。だがその無いこそ大事なことよのう。わしはその一人一人の無いが人体の細胞のように覗き合わさせて、完全な一体の“人間”と言えるものを顕わしているように見えるんじや、つまり、地球上で人間と言えるのはこの一体の人、一人だけなのじやないかとな。」と言いながらキセルに又たばこをつ

め美味しそうに吸いながら、

「今はまだ戦争、飢餓、病気等いっぱい不幸な事が起つてゐるわのう。まあ一人の
人間でいえば手足に傷を負い、胃に穴があき、頭脳の働きもまだまだで、心も時々憂
うつになつてゐるということかのう。だがわしは悲観していないんだ。人間には頭脳
がある。知恵がある。愛がある。法も憶えがあるだろう、ちょっと足を擦りむいても
しばらくすると治つてゐるのを。体全体で治そうとして治していくのを。人はきっと
無意識の内に健康正常な方へ向かおうとする力があるよう思ふんじや、だから難し
い事ではない、自然にそうなつていくだろうのう。」

「何千年も出来なかつた事が出来るのだろうか」

「うんそうじやなあ、人間には頭脳がある。このまま科学その他の研究・技術が進
めば、ある時から人口も減少し、物は世界中に行き渡る日が遠からず必ず来ると思う。
問題は心の世界じやのう。」

そう言うと、まるで自分に言い聞かせるようにして言つた。

「まず最初は、自分自身が安らかになる事。つまり一個の細胞が健康正常になる事。
他人様の事はわからん事がほとんどじやのう。だが自分が自分の心の内を覗るのだから
ら、何故腹を立てたのか、何故悲しいのか、一番良くわかるわのう。だが思い込んだ

り、思い違いなどしているとそれが個性のようく錯覚したりして、なかなか自分でも
視えん事が多くてのう。だが案外、他人様の方がよく見ていて下さつたりする事もある
のう。そう思えたたら他人様に言つてもらえた頑固な考え方等、ポイポイ捨てて身軽
になつたら良いわのう。又、別の方法でよく講習会とか研修会とか色々あるわのう、
そういう中で自然界の理に気づいて、いやな自分の考えをポイポイ捨てたら軽う軽う
なるわなあ。

そして心が幸になつた者はその分自然に他の人に心の手を差しのべてゆくものさ。
親愛の情かのう。そして互いに物心共に幸になつてゆく。つまりそういう人達から社
会組織を変革して不幸の人のいない社会愛社会を出来る所から創つてゆく。そしてそ
の幸な生き方を子供に繋ぎ、いつの日か全ての人が幸福人になり、健康正常で完全な
『地球人間一体の人』が出現したとき、その細胞の個々の人間は安息の内に、眞の自
由を得、子供が遊ぶように楽しく暮せるようになるんじやなからうかのう。』

法は呆然と聞いていた。

「お祖父ちゃんはどうしてそう思えるようになつたの？」

「まあ、少しの本やら、人の話いやら、自然の営みの内で活かされて生きていると
そう思えるのじやが。わしや、自然の子じやからうのう。アハハハ……。わしの話もど

んなもんかわからんわからん。わしは初夢の話しでもしたのかのう。アハハハハ⋮⋮⋮。」

法は庭に出た。上気した顔に寒気が心地良い。何と広い夜空、何と美しい星々、赤、青、黄色、白い光が次々と通り越してゆく。自分は浮遊しているのだろうか。

「法、法、もう酒はいいの！」母の声にハツと我に返った。

松の内も過ぎた頃、一との面会が近づいて来た。法はああも言おう、こうも言おうと祖父との会話を思い出しながら考え続けていた。そして、その日の午後二時と決まつた。ふと窓をみると雪が降つて來た。風の中を右へ左へと揺れながらまるで白梅が舞つているようだ。美しい。

「係長、一を連れて来ます」

「はい」とうなずき面会室へ向かつた。

大声がだんだん近づいて来る。室へ入つて暴れ、椅子を蹴飛ばしながらようやく座らされた。法は一の顔をジイーと覗た。

「この子は一体の子、私は兄、一は弟」とつぶやいた。

法はそれを聴いたとたん体が震え滂沱の涙が溢れ止まらなくなつた。一は悪態をついていたが静かに一、一、と泣き続ける法をみて次第におとなしくなり、その内、身を震わすと「ママー！」と呼んで机にふれふし大声で泣き出した。
法は一の肩を両手で抱いて「一緒に生きてゆこうな、一緒に生きてゆこう」と何度も言った。

「お父さん！お風呂の用意が出来たわよう！」



「今日は初雪も降つて寒いからしつかり暖めてね」

「ハイハイ」

湯船でキヤツキヤツ喜ぶ娘を見ながら法は額をくつつけ「恵、おまえはどこの細胞になるんだろうね、一体を動かすものは頭でも足でもどこでも一役。差などあろうはずはないんだよ。おまえが楽しく出来るところをやらせてもらいなさい。わからなくなつたらまわりの人を見てもらつて合うところを見つけなさい。きっと楽しく生きてゆけるからね」

「お父さん！ いつまで入つているの、恵がのぼせちゃうでしょ！」

「ハイハイ」

二〇〇九・三・二五日

完